

本当の幸せとは ～フィリピン国際協力ボランティア～

関西大学三回生 システム理工学部

物理応用物理学科 中山晴貴

「Milky way! milky way!!」誰かが叫びます。見上げるとそこには満天の星空でした。日本ではこんな景色は見えません。星空だけでなく、この国で僕は今まで見えていなかったものをたくさん見ることができました。大学三回生の夏休みのことです。

1 動機

「自分の中でゆるぎない教育観を持て。」教職の授業で何回この言葉を聞いたかわかりません。将来教師になりたいと思っていましたが、そこまで熱い情熱を持っているわけではなく、「教育観を持て」と言われても、具体的にどうすればいいのかわかりませんでした。このまま免許をとって教師になることに不安を覚えた僕は、何か手がかりを見つけるため、夏休みの一週間フィリピンの児童養護施設で子どもと交流するボランティアに応募しました。

2 漁村の少女

ボランティアでは施設にいる子ども達とサッカーなどのスポーツや、折り紙、鬼ごっこなど様々な方法で遊びました。他にも現地の学校や漁村などを見学させていただく機会もありました。

僕が漁村に行った時の話です。出発前にかなり貧しい村だということは聞いていました。正直に言うと、行くと決まったとき、身の安全と金品が奪われないか少し心配していました。

村には海辺に集落があり隙間を埋めるように丸太でできた小屋が立ち並んでいました。4人以上の家族が全員入れると思えないほどの小さな家です。家の中を覗いてみると必要最低限の生活用品しか置いていないようでした。声がしたので、その方向に行ってみると、決してきれいとは言えない泥の付着した服を着て、一人ずつ交代で子供をあやしている少女4人と出会いました。聞くと、4人は姉妹で、一番下の2歳の女の子の世話をしているようでした。しかし、その少女たちも年は7歳くらいなのです。父、母は仕事で、帰りを待っている、とたどたどしい英語で言っていました。

日本で同じようなことがあればすぐに児童相談所に引き取られてしまいます。ある程度予想はしていたつもりですが、実際このような生活環境を見て僕は衝撃を受けました。しかし同時に不思議に思いました。4人の少女は複雑な環境にあるにもかかわらず、みんな笑っていたことです。4人で仲良く、日本でいう「ケンケンパ」をやっていて楽しそうでした。

少女たちだけでなく、会う人会う人みんな笑っていました。子ども、老人ともに僕たちを見て笑って手を振ってくれました。

3 幸せにする教育

忙しそうに余裕もなく毎日を生きる日本人。その日の暮らし考えて気ままにすごすフィリピン人。どちらが幸せなのでしょう？幸せというのは何なのでしょう？日本に帰ってからよく考えました。まだ、答えは出ていません。しかし、一つ分かったことがあります。それは、幸せになる力を子どもたちに授けることが教師の仕事だということです。

日本人は教育を受けて国民全員が幸せになっているのでしょうか？過去、日本は経済発展させるための手段として教育を用いました。結果として国は豊かになりましたが、校内暴力やいじめ問題など、様々な社会問題を引き起こしました。心の発達が不十分のまま知識だけ身に着けさせてしまったことが原因として挙げられます。

しかし、僕は考えました。フィリピンのような発展途上国は、漁村で見たような豊かな心を持ったまま、教育を発展させ国を豊かにできる可能性があります。今回行った児童養護施設では、便利な道具を持っていなくとも、仲間と分け合い、助け合って生活している子どもがたくさんいました。子どもたちの目には僕が今見えていない夢や希望が映っていました。希望の光を少しでも多く灯すために、僕は今後もできるかぎり発展途上国の支援を行っていきたいと思います。そして幸せとは何なのかという問い。これは将来、教師を目指すならば、答えを見つけなければならないと思っています。この夏、フィリピンで見た発展途上国の人々。ここに答えのヒントがある気がします。